

## コリント第二の手紙——翻訳と訳注(二)

山内 一郎

### 〔凡例〕

- 一、翻訳の底本には United Bible Society 発行 K. Aland, M. Black 他編の The Greek New Testament 第三版(一九七五年)を用い、小見出し、段落、章節の区分けなども概ねこれに従うが、適宜ネストレ・テキスト(第二八版)も照合し、異読を検討の上訂正する場合もある。
- 二、〔 〕は UBS 本文にないが、訳者が補足・附加した部分である。
- 三、本文の読み方、解釈の上で留意すべき点についてはすべて訳注で扱う。
- 四、脚注中、訳例の後に付した version ならびに訳者名は多く略号(The Revised English Bible → REB)もしくは略記(新共同訳 → 新共同、Wesley → Wes, Wilckens → Wilck. 等)を用いる。

承前(四・五までの翻訳と訳注は本誌三七号に掲載)

コリント第二の手紙(山内)

## 信仰によって生きる 四・一六一五・一〇

だから、私たちは気落ちしない。むしろかえって、たとい私たちの「外なる人」は滅び去るにしても、私たちの「内なる人」は、日毎に更新されてゆく。<sup>(2)</sup> 何故なら、私たちの一時的な軽い苦しみ<sup>(3)</sup>は、私たちに途方もない<sup>(4)</sup>重みのある永遠の栄光<sup>(5)</sup>をもたらすからである。「<sup>(1)</sup> 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。〔およそ〕見えるものは一時的で〔あり〕、見えないものは永遠だからである。

## (注) 四・一六一一八

- (1) ἀλλ' ἐι καὶ ~ = No, even though ~ (TCNT).
- (2) ὁ ἔξω ἀνθρώπος, ὁ ἔσω ~ = the outward man ~ the inward man (Wes) の意味内容については、五・一七の他 I コリ一五・四五(「最初のアダム」「最後のアダム」も参照。「外的」「内的」の対照はここで単なる霊肉二元論につきるものではなく、むしろ実質においてガラ二・二〇に対応するであろう。ὡς δὲ ὁ οὐκ ἐν ἐγῶ, ὅτι δὲ ἐν ἐμοὶ Χριστός (「内なる人」) ὁ δὲ οὐκ ἐν ἐμοὶ ἀσκήσι (「外なる人」)。そのかぎり「内なる人」のゾーエーは状態ではなく、将来からの働きかけにあげ開かれた実存の、時々刻々の新しい生成過程というほかない (cf. Bull)。ピリ三・一二―一四、ガラ六・一五、ロマ二・二参照。なお前者の「滅び」を人間の自然的中動相、後者の「更新」を神による摂理的受動相と解す。
- (3) a b 直訳は一時的な「苦しみの軽さ」、永遠の「栄光の重さ」。
- (4) καθ' ὑπερβολήν ~ eis ὑπ. über alles Maß und Ziel hinaus (Bauer), beyond all comparison (Gspd).
- (5) 独立属格構文を前後の理由づけの文脈にかけて読む。

一 というのも、<sup>(6)</sup>たとい私たちの地上の幕屋という住居<sup>(7)</sup>〔身体〕が壊されても、私たちは、神が〔用意される〕<sup>(8)</sup>建物、人の手で造られない、天にある永遠の住まいをもっていることを知っているからである。<sup>(9)</sup>二 そういうわけで、「いま」この〔地上の住まいの〕<sup>(10)</sup>中で呻いているが、「むしろ」天が〔与える〕<sup>(11)</sup>私たちの住居〔という衣〕を上に着ることこそ私たちが切望するところである。<sup>(12)</sup>三 〔実際〕<sup>(13)</sup>たとい〔地上の住まい〕<sup>(14)</sup>「衣を」脱いでも、私たちは裸であるのを見出されるわけではない。<sup>(15)</sup>四 何故ならこの〔地上の〕幕屋の中にいる私たちは重荷を負わされ呻いているが、それは〔地上の衣を〕<sup>(16)</sup>脱ぐことを欲するからではなく、むしろ死ぬべきものが生命によって飲み込まれてしまうために〔天が与える衣をさらに〕<sup>(17)</sup>上に着ることを欲するからである。<sup>(18)</sup>五 私たちをまさにこのことのために備えて下さった方は、<sup>(19)</sup>神である。<sup>(20)</sup>〔すなわち〕神は、その保証として私たちにみ霊を賜ったのである。<sup>(20)</sup>

六 だから私たちはいつも心強いが、<sup>(21)</sup>しかも、<sup>(22)</sup>私たちが身体を住処<sup>(23)</sup>として知っているかぎり、主から離れていることを知っている。<sup>(24)</sup>七 何故から、私たちは〔なお主を〕<sup>(24)</sup>見ることによってではなく〔ただ彼を〕<sup>(24)</sup>信じることによって歩んでいるからである。<sup>(25)</sup>八 〔ともかく〕<sup>(26)</sup>私たちは心強い。そして〔本当は〕<sup>(26)</sup>むしろこの身体から離れて主のもとに住むことを希っている。<sup>(27)</sup>九 それゆえ〔この身体を〕<sup>(28)</sup>住処としていても、〔身体から〕<sup>(27)</sup>離れるにしても、<sup>(27)</sup>ただひたすら主に喜ばれるものであることを求めている。<sup>(28)</sup>一〇 何故なら、<sup>(29)</sup>私たちはみなキリストの裁きの座の前に立たされ、<sup>(29)</sup>善であれ、<sup>(30)</sup>悪であれ、<sup>(30)</sup>身体を住処としている間に行ったことに<sup>(31)</sup>応じて、<sup>(31)</sup>各自が報いを受けねばならないからである。<sup>(32)</sup>

(注) 五・一一〇

(6) 本節は直前四・一七以下の内容を理由づけ、五・六において再び四・一六につながる。

コリント第二の手紙(山内)

- (7) τῷ σκηνῶν. 補足説明・同格的属格。そしてこの「幕屋」を地上のソーマ「身体」と同定する訳もある。if our tent — that earthly body which is now our home — (TONT)
- (8) 直訳は a building from God (Wes). 他に a building which God has provided (NEB, REB)
- (9) οἰδομεν が四・一四の εἰδότες と同様、反ヴァーシス的なキリスト教信仰の認識内容を指示する可能性もある (Bult)。  
ἐχομεν は将来にまたがる所与の確実性を指示。なお、ἐν τῆς οἰκουμένης ἐχομεν にかけるものもあるが (Wey, Phil 岩間) やはり近接語に結びつけるのが自然 (Wes, NEB, REB 協会、新共同)。
- (10) ἐν τούτῳ, 理由の意に解するものもあるが (Bult, Gspd) 多くは οἰκῶ (一・四節) を補い、ῥαβ を活かして訳す。στενάττειν (UBS テキストはこの語の次にコンマを付す。cf. NEB) = to groan の意味内容に関してはロマ八・二二—二三参照。
- (11) ἐξ οἴκου ἐκ θεοῦ (一節) τὸ οἰκητήριον = dwelling 「居場所」(ユダ)。ここでは比喩的用法。with the robes of my heavenly mansion (Con). なお、パウロにおいて他に σάμα πνευματικῶν 「霊のからだ」(一コリ一五・四四) という表象が注目される。
- (12) ἐπιτροβούρες (< ἐπιτροβέω) 以下の分詞構文を追加的に訳し、原語の強調点を活かす。
- (13) εἰ γὰρ καὶ = even if. 強調の不変化詞 γὰρ はしばしば訳出されず、εἴτερον (if indeed) の異読 (p<sup>45</sup>BDF 他) も意味上大差ない。
- (14) Νεστόν (二六版) にすれば ἐκδοσάμενοι (< ἐκδύω 「脱ぐ」) D\* a<sup>18</sup> に代えて ἐνδοσάμενοι (< ἐνδύω 「着る」) と読む有力写本が少なくない (p<sup>45</sup>SBCD<sup>2</sup> 他、AV, Mof, Plum 協会、フラン、岩隈他参照)。しかし UBS (三版) のアラトウスは脚注さえ欠く (Bult. 新共同)。おそらく論敵を相手に ἐπευδυσασθαι (「こちらに着る」と) に重点をおく前後の脈絡に照らして、前者の読み方が正しいと判断される。ブルトマンは、後者にとると意味は全く trivial で εἰ γὰρ καὶ の効目が失われるという。
- (15) 四節は直前一節以下の内容を論争的に反復する。βαρυνόμενοι (βαρέω = burden の現分、受動相) の次に、多くはコンマを付す (UBS, Nes, AV, RSV, Luth, Wes, Jer 他)。ただし NEB, REB は二節に平行する形で στενάττειν の次で区切る。
- (16) ἐφ' ᾧ οὐ = ἐπὶ τούτῳ οὐ ὅτι = not because of that

- (17) *ἕνα* 以下が「ブルシア」と復活の待望を言表し、内容はイコリ一五・五三およびロマ六・一三に呼応する。
- (18) *εἰς αὐτὸ τούτο, to this very thing* (Wes), For this, nothing else (Knox) とは、二一四節の「天が与える衣を着せよう」を指す。
- (19) *ὁ κατεπρασαμένους < κατεπράξατο* achieve, create, bring out. 以下は「準備せよ」の意。Bauer, Knox, Con, Wilck 参照。
- (20) *ὁ δοῦς* 以下は、五節前半を具体的に説明する関係文。終末論的希望が幻想ではなく、神の愛の賜物によって確証されている事態を言表するが (Bult), *ἀπαθάνη* は「死に打ち勝つ」の意。一・二二の訳注参照。
- (21) *θαρρύντες < θαρρῶν*, being of good courage (ASV, TEV), confident (Mof, Wms, AV), behave undauntedly (Wes), zuversichtlich (Wilck, GN). 前節までの逆説的生死観ゆえの揺がぬ確信と安心の言表。
- (22) 以下は、*θαρρύντες < εἰδότες < οἶδα* 二つの現在分詞から成り、八節の *θαρρύνειν* の反復(二)に続く *εὐδοκῶμεν* が全体の定動詞と目される一種の破格構文 (Anakoluth)。*καὶ εἰδότες* を文脈上 *θαρρύντες* を限定する意味 (Wind) に解す。obwohl wir wissen, daß ~ (Wilck)。
- (23) *ἐνδηγούμεντες* (現分) < *ἐνδηγῶν* = be at home ↔ *ἐκδηγῶν* = be away (Phi, TEV 参照)。他は our spirits are exiled from the Lord's presence so long as they are at home in the body (Knox), Solange ich in diesem Körper lebe, bin ich vom Herrn getrennt (GN) など。何れにせよ「天」を「住处」とするレニズム的思想を反映する言表。
- (24) 一時的な *τα βλέπούμενα* 「見えるもの」(四・一八)と異なり、*εἶδος* (> *εἶδος*—*ὁραῶν* の第二エオリスト) はむしろ「見えないうもの」を「見せよ」(能動)を指す。三・一八の他ヨハ一七・二四、一ヨハ三・二参照。For we walk by faith, not by sight (Wes). 以下は一つの明解な意識。Wir können den Herrn jetzt noch nicht schauen, sondern sind nur durch den Glauben mit ihm verbunden (GN). そしつこの「信仰」は「希望」と不可分に結合(ガラ五・五、ロマ八・二四以下参照)。なお文末のコロンと挿入的文脈ゆえか、AV, Wesなどは七節を括弧に入れる。

- (25) ἐκδημιῶσαι, εὐδημιῶσαιともに将来の一回性を合意するエオリスト不定形であるが、内容的に死における主との共在か、あるいはパルシーシア時における復活にかかわるか明言されていない。恐らく死後、終末との中間時に備えられる天上の住処とパルシーシアにおける最後の義認への待望・確信が一体化した言表であろう(イテサ四・一七、ペリ一・二三参照)。なお *pros tou kyriou* 「主のもとに」(フラン、新共同)は、直前の *ek tou swmatos* あるいは六節の *apo tou kyriou* に呼応し、*eu Xristw—sun kyriw* と平行するような対句ともとれる。
- (26) 理由を指示する *dio* と直結する強調の *kai* は元語的で訳出しない。
- (27) *eite eite* 直訳は *whether at home or absent* (ASV, Wes 他), *sei es zu Hause, sei es in der Fremde* (Wick). したがって内容を「主のもとに住むにしても、主から離れていても」ととることもできよう。あるいは「生きていても、死んでいても」(イテサ五・一〇参照)を意味するレトリックか (cf. GN)。
- (28) *philoteiōmetha* we make it our aim. (ASV), I strive earnestly (Con), our one ambition is (TCNT), *setzen wir unsere Ehre darein*, (Wick). なお *euagelos* の実践的・倫理的含蓄(ローマ二・一以下、ペリ四・一八他)についての指摘がある (cf. Bult)。
- (29) *pharepōthēnai* > *pharepōō* エオリスト不定法受動相 all be made manifest (ASV). 審き主は「キリスト」(イテサ二・一九、イコリ四・五他)のほか、時として「神」(イテサ三・一二、ローマ一四・一〇他参照)。
- (30) *phōlou* (SC 他) に代えて *kakou* を入れる写本<sup>16</sup> BDFG 他。また *eite eite* の句を *koimōnetai* の目的語と解す可能性 (Bauer 岩隈) もあるが、とらえない。
- (31) パウロの身体論的附加。*ta dia tou swmatos* の同格的言い換えが *pros* (規準) *a epitaxēu* = according to what he has done (Wes) だとすれば、*dia* を時間的 (temporal) 経過と手段 (instrumental) の両意で用いる。the life he has lived in the body (TCNT)。
- (32) *dei* 終末論的必然 (Bult) を指示(イコリ一五・二五、五三、マル八・三二他参照)。*ekastos* 「各自」は *pantras* (> *pas*) 「人

間すべて」に対して、個の具体性、人格の主体性を言表する（Iテサ二・一一、四・四、ロマ一四・一二参照）。パウロのなかに「現在の」信仰による義認（ロマ三・二一以下、五・一他）を内包した伝統的な終末の審判・報いの思想（ガラ六・七、Iコリ六・九、ロマ二・六他参照）が生きている。「最後の」義認（Iコリ四・四以下他）に向けて、ここでは信仰の中身が問われる（ガラ五・六参照）。

## 和解のつとめ 五・一一―六・一三

二 このように、<sup>(1)</sup> 私たちは主に對する畏れを知っているので「何とか」人々を説得し「ようと努め」<sup>(2)</sup> ているが、しかし神のみに私たちは「ありのまま」<sup>(4)</sup> 知られている。そこで私は、あなたがたの良心においてもまた「同様に」<sup>(5)</sup> 知られることを望んでいる。三 私たちは再び自分自身をあなたがたに推薦するのではなく、むしろあなたがたに、私たちがゆえの誇りの機会を与えるのである。それは、<sup>(6)</sup> うわべを誇り、<sup>(7)</sup> 心で「誇ることの」ない人々に対してあなたがたが「何か応えるものを」<sup>(8)</sup> 持ち得るためである。四 何故なら、もし私たちがエクスタシー（脱自）<sup>(9)</sup> を経験したのなら、「それは」神との間のことであり、<sup>(10)</sup> 正気であるのは、あなたがたのためである。五 「すなわち」キリストの愛（アガペー）<sup>(11)</sup> が私たちをしめつけるからであり、「実際」私たちは、一人のひと「キリスト」がすべてのもののために死んだ、<sup>(12)</sup> それゆえ、そのすべてのものが死んだ、<sup>(13)</sup> と確信している。六 彼「キリスト」はすべてのもののために死んだが、それは生きていた者たちが<sup>(15)</sup> もはや自分たちのためではなく、むしろ彼らのために死んでよみがえらされた<sup>(16)</sup> 「この」方のために生きるためである。

## (注) 五・一一―一五

コリント第二の手紙（山内）

- (1) 不変化詞  $\epsilon\upsilon\omega\upsilon$  の用法は多義的で、単に移行・連結の修辞法にとり、訳出しない場合(新共同他)もあるが、ここでは文脈に照らし結末的 (inferential) 指示に解す。Knowing therefore (Wes). 三・一三、五・六、二〇他参照。
- (2)  $\phi\acute{o}\beta\omicron\varsigma\ \tau\omicron\upsilon\ \kappa\upsilon\rho\iota\omicron\upsilon$ . gen. obj. バウアーは  $\epsilon\upsilon\omega\upsilon$  と  $\epsilon\upsilon$  の Ehrfrucht (「畏怖」) の意味 (七・一、ペリ二・一二以下、ロマ三・一八、一・二〇以下、一三・七他参照) を取り出し、合わせて「主に対する怖れを惹き起すもの」として一〇節の「迫り来る裁き」(das drohende Gericht) との繋がりを示唆する (Bauer, 1707) したが、 $\epsilon\iota\delta\omicron\tau\epsilon\varsigma$  は神への畏怖における自己理解 (Bult.).
- (3)  $\pi\epsilon\iota\theta\omicron\mu\epsilon\nu$  意欲を表す現在形 (Turner, 若隈) と  $\epsilon\upsilon\omega\upsilon$  の指摘がある。we are trying to win men (TCNT).
- (4) 解釈を伴う敷衍訳が多い。What I am is plain to God (Mof), yet my uprightness is manifest in the sight of God (Con), our motives are plain to God (TCNT), vor Gott aber sind wir (schon) offenbar (Wilck).
- (5)  $\epsilon\upsilon\ \tau\alpha\iota\varsigma\ \sigma\upsilon\nu\epsilon\iota\delta\eta\sigma\alpha\upsilon\ \eta\mu\acute{\omega}\nu$ .  $\epsilon\upsilon$  を手段的に解する  $\epsilon\upsilon$  の  $\epsilon\upsilon$  が (by the witness of your consciences — Con)  $\epsilon\upsilon$  の例外的。
- (6)  $\delta\iota\delta\omicron\upsilon\tau\epsilon\varsigma$  ( $\langle$   $\delta\iota\delta\omicron\mu\iota$   $\rangle$ ) 現在分詞だが、 $\sigma\upsilon\ \sim$   $\alpha\lambda\lambda\acute{\alpha}$  構文中  $\epsilon\upsilon$  は、主動詞 ( $\sigma\upsilon\nu\lambda\omicron\gamma\alpha\upsilon\epsilon\upsilon$ ) と並列する継起の意味に訳す。  $\eta\mu\acute{\omega}\nu$ , on our behalf の他 in us (TCNT, Bas) など。
- (7)  $\epsilon\upsilon\ \pi\upsilon\sigma\tau\acute{\omega}\pi\acute{\iota}\omega\ =\ \kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\ \sigma\alpha\omicron\kappa\alpha$  (一・一・一八)(Bult)  $\epsilon\upsilon\ \kappa\alpha\rho\acute{\alpha}\iota\alpha$  に関して例えばサム上二六・二七、一テサ二・一七参照。
- (8) 目的語を欠く  $\epsilon\upsilon$  は、something to say (Wms, NEB, Bult 若隈) something to answer (AV, Wes, TCNT, RSV) etwas in der Hand (Wilck) などや補へ。
- (9)  $\acute{\epsilon}\xi\epsilon\sigma\tau\eta\mu\epsilon\nu$   $\acute{\epsilon}\xi\epsilon\sigma\tau\eta\mu\iota$  の第一人称複数。語義上、 $\acute{\epsilon}\xi + \acute{\iota}\sigma\tau\eta\mu\iota =$  to put out of place)  $\acute{\epsilon}\kappa\sigma\tau\alpha\alpha\iota\varsigma$  と結ぶ  $\epsilon\upsilon$ 。wenn wir in Ekstase geraten (Wilck), if we are transported beyond ourselves (Wes), if I be mad (Con), if I was out of my senses (Gspd) など。
- (10) 連結的  $\epsilon\iota\tau\epsilon$  (if)  $\sim$   $\epsilon\iota\tau\epsilon$  (if) 構文中、 $\theta\epsilon\acute{\omega}\varsigma$  (一コリ一四・一参照)  $\eta\mu\acute{\omega}\nu$  と  $\epsilon\upsilon$  の advantage (有利) の与格と解されるが、むしろ反対者への Polemik を念頭におくと以下の現代訳が明解。Wenn ich einmal verrückt scheine, so ist das eine Sache zwischen Gott und mir. Wenn ich dagegen bei Vestand bin, dann geschieht das für euch (GN, cf. Gspd).  $\epsilon\upsilon\omega\upsilon$  もまた異義



と預言の対比（イコリ一四章）が想起される。

- (11) ἡ ἀγάπη τοῦ Χριστοῦ. 主語的であるは所有の属格。συνέχει antreiben (Lietzmann, Windisch, Wick, 「駆り立てる」新共同) controls (Gspd), overmasters (Wey), the very spring of our action is (Phi) 「廣くやる」(フラン)「強く迫る」(協会)。しかし「抑え」 constraineth (Wes), in Sehranken halten (Wendland, Bauer) の含蓄を活かす。
- (12) ὑπερ᾿ ἀρέθαιεν. イテサ五・一〇、ガラ一・二〇、ロマ五・六、八、八、三三、一四・一五他参照。私たちの「罪のため」の死(ガラ一・四、イコリ一五・三他)との間に根本的差異はないであろう。πάντωνはキリスト者すべてと万人の両義性を示す。
- (13) οἱ πάντες ἀπέθανον. 文脈からは「古い」生来の肉に死んだ、の意に解される。ロマ六・四—六参照。ところが、TEVは they all share in his (Christ's) death である。
- (14) κούρατος κύνω (= judge, convince—Mof, Knox) のエオリスト分詞。従って主動詞 συνέχειは「先行する回心時やその後」の理由とする訳もあるが (Plum, Wey, NEB) むしろ同時的な理由 (Wes, Bas, Bult) に解す。他に多くは前文から独立させて訳す (Phi, Knox, GN, 協会、新共同他)。<sup>(17)</sup> ここから一五節に入れるケースもある (cf. TR<sup>a</sup>, Plum).
- (15) οἱ ζῶντες. キリスト者に限らず、およそ地上に生きているものすべて。they who live (Wes), men, while still in life (NEB).
- (16) ἐρεθίζοντα. エオリスト分詞受動相。who was raised for life (NEB, cf. TEV, Wick) イコリ一五・二二、ロマ七・四参照。神を主語とする復活伝象（イテサー・一〇、ロマ一〇・九他多数）と呼応する言表。

<sup>一六</sup> それゆえ私たちは、今からのち誰をも肉によつては知らない。<sup>(17)</sup> たといかつては肉によつてキリストを知っていたとしても、今はもうそのようには「彼を」知らない。<sup>(18)</sup> だから誰でもキリストを信じるなら、<sup>(19)</sup> 「その人は」新しく創

られたものである。<sup>(20)</sup> 古いものは過ぎ去り、見よ、「すべてのものが」新しくなっている。<sup>(21)</sup> しかし、すべてのことは神から「出ている」。<sup>(22)</sup> 神はキリストによって私たちをご自身に和解させ、また私たちに和解のつとめ<sup>(23)</sup>を与えられた。<sup>(19)</sup> すなわち、<sup>(24)</sup>神はキリストによって世をご自身に和解させ、彼ら<sup>(25)</sup>（世の人々）の罪過<sup>(26)</sup>の責めを彼らに負わせないで、私たちが<sup>(27)</sup>の間に和解の言葉を委ねられたのである。<sup>(28)</sup>

(注) 五・一六—一九

(17) *katà saqka*. after the flesh (Wes), from the world's (or human) standpoint (TCNT, cf. TEV, RSV), by what is external (Mof), nach menschlichen Massstäben (GN). サルクス (肉) は人間の肢体あるいは地上の存在の特性としての制約・有限性を指す。従ってパウロが *ἐν (τῇ) σακκῷ* 「肉にある」という場合はとくに神学的洞察を含意せず、むしろ場所的限定、すなわち朽ちゆく肉体の領域を指す (Iコリ一〇・三、ロマ七・一八、ピレ一六他)。ところが *katà saqka* 「肉に従って」という用法は二重の意味を合せもつ。すなわち一方で、地上的存在の形態一般を指示し、アブラハムもキリストも「肉に従えば」ユダヤ人であり (ロマ一・三、四・一、八・三、九・五参照)、「肉による」イスラエル (Iコリ一〇・一八、ロマ九・三) は「神のイスラエル」から区別される (ガラ六・一二、一六)。他方、この句が動詞を限定する場合、その行為と存在における罪 (*quapota*) の本質を言表することになる。サルクス自体がただちに罪と同定されるのではない。むしろ必ず破れ朽ちゆくはないサルクスに眩惑され、ついにこれに隷属するような態度・振舞い、その主体のあり方が根底から問われる (一・一七、一〇・二、以下、ガラ四・二三、ロマ八・四一五、一一二)。

(18) *ἐνσώκατος (< πτωσος)* 現在完了形はしばしば現在の状態を指示するが、ここは *ei kai* (even if) を伴う一種の仮定文か。すなわち地上のイエスの史実性やイエス伝承自体の否定ではない。むしろパウロはそれらを前提している (ガラ三・一、Iテサ四・二、一五、Iコリ七・一〇、九・一四、一一・二三、ロマ一四・一四参照)。にもかかわらず、サルクスを自足の原理

- (19) *κατὰ σαρκά* を用いてイエス認識における傲慢 (ヒュプリス) が厳しく退けられ、却ってキリストとの人格的交わり＝信仰 (*ἐν Χριστῷ*) が提唱される。
- (20) *εἴ τις ἐν Χριστῷ*, if any one (be) in Christ (Wes, Phi, Bas, Wilck 協定本)。ウエスナーは、*ἐν* は A true believer in Him を指す。他は in union with Christ (TCNT, トンソ) united to Christ (NEB, REV 新共同)。
- (21) 原文は a new creation の。新は he is (becomes) a new being (person) (TCNT, TEV, Phil 他)。内容について四・一六、ガリニ・二〇・一五、ロマ八・一、一〇参照。
- (22) *ἔγρονεν* (*ῥυνομαι* の動詞) + *καὶ* (英語的連接) *καὶ πάντα* を附加する写本 D<sup>o</sup>KP 他。all has become new (Con)。また the new has come (Mof, RSV, TEV, cf. TCNT, NEB, Wilck トンソ、新共同)。*ἰδοὺ* = Behold! The present, visible, undeniable change (Wes)。
- (23) *τοῦ καταλλάξαντος* (< *καταλλάσσω*)。訳語や文脈の分節の文語的用法。And all things (are) from God, who hath reconciled us (Wes) + *διὰ Χριστοῦ*。仲保者キリストの働 (死) による神との和解は五・一五や、五・一〇の内容と平行する。
- (24) *τὴν διακονίαν τῆς καταλλαγῆς*: obj. gen. the work of making friends of enemies (Beck)。「和解のために奉仕する務め」(新共同)。「ほかの人々との交わりを促すため」に奉仕する務め」(トンソ)。*διακονία* の内容について三・七一九、五・二〇参照。
- (25) *ὡς ὅτι* = 聖徒語 *ὅτι*, namely (Wes), what I mean is (NEB)。
- (26) 聖徒語 God was in Christ, reconciling the world to himself (Wes, ④他 Wilck 参照) に対して、*καὶ* (未完形) + *καταλλάσσω* (本語) を用いて、*καὶ* God, in Christ, was reconciling (TCNT, ④他 Wey, Bas, NEB 参照) が多く、ただ、*καὶ* の後述の *περιφρασίς* の用法は、パウロに稀なものである。伝承を用いた可能性もある。また *ἐν Χριστῷ* せ Gspd, TEV せ *διὰ Χριστοῦ* と同義である。through Christ. 新共同は「キリストに」を「*ἐν*」とする。
- (27) *αἰῶν* せ *κόσμος* (ガリニ・一四他) にかかると代名詞。なお *παρὰ τω* 「罪過」(ロマ四・二五他) と *ἀμαρτία* 「罪」(一

リ (一五・三・ガラー・四他) の相違は不明 (cf. Bult).

(27) *μη λογιζόμενος* (< *λογίζομαι* < *λόγος*) 先行文と連結した分詞構文。not imputing their trespasses to them (Wes), not counting ~ (Phi), not charging ~ (Wey).

(28) *τὸν λόγον* に *τὸ εὐαγγέλιον* を代入または附加する写本<sup>p.6</sup>他。Bas, RSV 協会。*θέμενος*, *τίθημι* の第一エオリスト分詞中動相。先の *πισ* を受ける過去完了の紆言法とも解される (岩隈)。が、むしろ一八節の *δοῦτος* (第二エオリスト分詞) と対応するであろう。翻訳と *πισ* は 'What I mean is, that God was in Christ reconciling the world to himself, ~ and that he has entrusted us with the message of reconciliation (NEB) が説明的に意図を指示する未完了形 (progressive) とエオリストの區別を言表。' *ἐν ἡμῖν* = in der Gemeinde (Bult).

三〇 それゆえ私たちは、神が私たちを通して勧めておられるかのよう<sup>(28)</sup>に、キリストのために使者として働いている<sup>(30)</sup>。キリストのゆえに<sup>(31)</sup>「あなたがたに」お願いする。神と和解されよ<sup>(32)</sup>。二 彼「神」は罪を知らない方を私たちの「罪の」ために罪とされた<sup>(33)</sup>。「それは」私たちが、彼「キリスト」を信じることによ<sup>(34)</sup>って神の義となるため<sup>(35)</sup>である。

(注) 五・二〇—六・二

(29) *ὡς + τὸν Θεοῦ παρακαλῶντος* (独立属格) は、神のイニシヤタイウを言表。as if, as though, God appealing by me, as it were (Mof).

(30) *προεβέβη*. we are the representatives of Christ (Bas), für Christus als Gesandter wirken (Bauer). *ἰπρὸν ἑ*・*ἰπρὸν* に *ἑ* を添<sup>照</sup>。

(31) *ὑπὲρ Χριστοῦ*. on Christ's behalf (TCNT), in Christ's name (Knox), an Christi Statt (Wilck).

- (32) *καταλλάγητε τῷ θεῷ*. 第一エホリスト命令法發動相「be ye reconciled to God (Wes) ㊦ TCNT, Wms 参照)」。make your peace with God (Knox), Lass euch versöhnen mit Gott! (Wielck).
- (33) *ποιέω τινά τι* (「働かせる」) = make one something. For he hath made him to be sin (AV, ASV, Mof, Phi ㊦㊧) の *ἐπένα* a sin offering (Wes), one with the sinfulness of men (NEB), *share our sin* (TEV). ガル ㊦㊧・㊦㊧参照。
- (34) *ἐν αὐτῷ*, in him (AV, Knox, NEB), in Christ (Con, Phi), through him (Wes), through union with him (TCNT, Wms) 「そのかたより一致して」(トラン)「その方から」(新共同)。
- (35) *ἵνα* *ῥευνώμεθα δικαιοσύνη θεοῦ*. (gen. auctaris). *might be made the righteousness of God* (Wes), *might share* (TEV), *come into right standing with God* (Wms), *receive justification from God* (Nor), *be turned into the holiness of God* (Knox), Gottes Gerechtigkeit würden (Wielck). 「神との正しき関係を得るため」(トラン)。なおパウロにおいて同じくキリスト論的に解釈されるべき「神の義」の用例として、ローマ一・七 ㊦㊧・二一―二六他を参照。ただしロマ三・五は人間の不義に対する「神の義」(gen. sub.)を示唆する。

6章「そこで私たちは、<sup>(1)</sup>「神と」共に働くものとして、<sup>(2)</sup>また「あなたがたに」勧める。神の恵みをけっして空しく受け入れることがないように。<sup>(3)</sup>何故なら彼「神」は言われる。「喜ばしい時に私はあなた(の願い)」に耳を傾け、救いの日にあなたを助けた<sup>(4)</sup>。見よ、今こそ喜ばしい時、<sup>(5)</sup>今こそ救いの日。

(注)六・一以下

- (1) *συνεργούμετες* (< *συνεργέω*). as workers together (AV), (as) fellow labourers (with you) (Wes) (一・一四) 一コリ一・六・一六、ローマ一・六・三参照) に対して、多くは五・二〇の関連から *τῷ θεῷ* を補う。as God's fellow-worker (Gspd),

コリント第二の手紙(山内)

Sharing in God's work (NEB). 「神の協力者」(新共同) I テサ三・二 I コリ三・九参照。

(2) *eis* (徒昧) *kenōn*. in vain (Wes, AV), do not let it come for nothing (NEB), to nothing (REB).

(3) Es heisst ja (Wlick), He has said (REB) などに対し、God's own words are (NEB) の他、邦訳も「神」を主語とするものが多い。ロマ九・一五など参照。

(4) *καρπὸν δεκτῆν* (< *δέχομαι*) = in an accepted time (Wes) は時の与格。 *ἐτήκουσα* < *ἐτακούω* 属格支配。 I answered you (REB). *ἐβοήθησα* < *βοηθέω* 与格支配。 イザ四九・八参照。

(5) Wes, REB など *ἔστω* を補う訳が多いが、NEB は「到来」の意に解す。 The hour of favour has now come 。